山口大学ワンダーフォーゲル部
Yamaguchi Univ Wander Vogel

2002年度OB通信 Vol.2

2002年12月発行
発行者：〒753-0841 山口市吉田1677-1
山口大学体育会ワンダーフォーゲル部OB会事務局
URL　http://www.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~tabidori/
E-mail　tabidori@yamaguchi-u.ac.jp

はじめに

気象庁の予報では今年は暖冬とのことでしたが、関東でも15年ぶりの大雪となり、我らが東鳳翩山にも例年より早い雪景色が見られるなど相変わらず厳しい寒さが続く今日この頃、ＯＢの皆様方はいかがお過ごしでしょうか。夏合宿を乗り越えた現役部員たちはさらなる高みへとステップするためにがんばっているようです。

さて、今年の10月5,6日に行われましたYUWVOB総会ならびに東京支部発足記念総会は皆様のご助力を得てたくさんのOBの皆様に参加していただき無事に終えることができました。

今年はいろんな細かい規則の改正がなされたことよりOBの皆様にとって動きやすいOB会になったのではないかと思います。OB総会の模様や会則の改正された点やなどは詳しく載せてありますので時間が空いたときなどにご覧ください

なお、ＯＢ会についてなにかご意見、ご質問等ありましたら、上記のメールアドレスでも下記の連絡先でもご連絡よろしくお願いします。

OB会会長
末国　弘司

OB会副会長
木山　克彦

事務局
藤井　祐介

工学部代表
原　和義

～2003年1月1日より新事務局となります。年明けからの連絡はこちらへお願いします～

新事務局
藤田　康雄

新工学部代表
村田　隆行

1 2002年度OB会活動報告

OB総会in東京～10月5日～

2002年10月5日（土）に、東京都千代田区の烏山倶楽部において「山口大学ワンダーフォーゲル部OB総会ならびに東京支部設立総会」が開催されました。

～2002年度山口大学ワンダーフォーゲル部OB総会～

１、開会の言葉・・・木山克彦氏（本第５期）

２、OB会長挨拶・・・末國　弘司氏（本第３期）

３、出席者確認報告

４、議長選出・・・全会一致により　﨑間公久氏（本第４０期）が選出

５、議案審議

第一号議案：山口大学ワンダーフォーゲル部OB会東京支部の承認

→　全会一致で承認された。

第二号議案：OB会則改正（東京支部の記載と会計年度の変更）

→　全会一致で承認された。

第三号議案：2001年度会計報告

→　全会一致で承認された。

第四号議案：その他（議案なし）

～東京支部設立総会～

1、 開会の言葉・・・武富敏夫氏（本第８期）

2、 議長選出・・・全会一致により　高津俊雄氏（工第８期）が選出

3、 議案審議

第一号議案：山口大学ワンダーフォーゲル部OB会東京支部会則承認の件

→　全会一致で承認された。

第二号議案：東京支部役員選任の件

→　全会一致で承認された。

６、役員紹介および新支部長挨拶

支部長　武富敏夫氏（本第８期）
副支部長　福永俊美氏（工第８期）
事務局長　木村　均氏（本第９期）

７、報告及び連絡事項

８、閉会の言葉・・・木山克彦氏（本第５期）

９、記念写真撮影

～懇親会記念パーティー～

テーブルでのバイキング形式で行われました。本部と東京支部との交流も深まり、最後には参加者全員で旅鳥斉唱を行いました。

～ハイキング～

翌日の１０月６日（日）に高尾山にて記念登山が行われました。

ハイキング紀行

８：３０頃高尾山口駅に到着し、先に来られていたOBの方々と合流し、１４名で高尾山山頂を目指します。駅を出発し、いろいろと話をしながら稲荷山登山道へと向かい、会長の末國さんも果敢に登山道に挑まれました。そして途中の大きな木の立っている展望所にて休憩を取りました。OBの方々は疲れた様子もなく休憩時も様々な話に盛り上がって、あっという間に休憩を終え、再び歩き始めました。休憩した時間が自分にはけっこう短く感じられたのは気のせいでしょうか、OBの方々の時にはきっと今よりすごかったのかもしれません。何人かのOBの方はすいすいと登られ、どんどんと遠くに見られるようになって行きました。現役さながらの姿に頼もしさを感じた私でした。山頂まで終始和やかに昔のワンゲル活動や出来事について会話を交わしながら、ひたすら歩き続けました。そしてようやく山頂に到着すると、休日のせいかたくさんの登山客や観光客で賑わっていました。かつてこれほど山頂に人がいるのを見たことがなかったので、少々驚いた光景です。ベンチを全員で囲み、昼食となりました。OBの方が山で作る料理をいただきながら、自分は話に耳を傾けていました。コーヒーまで振舞っていただき、勝手ながら憧れを抱きました。一時間程度山頂で過ごし、案内板の前にて記念撮影を行った後、表参道コースにて下山をしました。途中から林立している杉を眺めながら静かな道を緩やかに下って行きました。杉の中には樹齢何百年と思わせるような太く高いものもあり、これにはOBの方も感嘆を覚えていたようです。ようやく下山終了したときには自分の足は下りでこたえたようでまさに棒のようでしたが、皆さんはまだまだ元気な様子でいらっしゃいました。最後にふもとの店に入り、食事やお酒を交わしてこの高尾山ハイキングは幕を閉じました。自分は今回の体験で様々な山口大学のワンダーフォーゲルを知りました。そしてそれは時がたっても色あせることなく根付いているものだと感じた次第です。自分自身も今のワンゲルを将来まで持っていければ良いと感じました。

第４２期執行部主将　　藤田　康雄

2 会長より

東京支部発足に寄せて

会　長　　末　國　弘　司

かねてよりご案内の通り、去る１０月５日に東京・烏山倶楽部にて２００２年度ＯＢ会総会を開き、念願であった東京支部が発足いたしましたので、ここにご報告いたします。

ＯＢが年々増加するにつれて、必然的に東京一円に在住のＯＢも増え、自然発生的に東京近辺の有志が集うようになり、ＯＢの間に東京支部が結成できればとの願いが生じたのでありますが、肝心の山口の組織が確立できずに今日に至ったのです。

しかしながら一昨年、２０００年１１月のＯＢ総会において、肥大化し、いわゆる幽霊会員が増大する一方の現状を憂い組織の建て直しを求める声が出されて、図らずも私がその大役を仰せつかりました。

そこで出された、ＯＢ会員資格をもっと厳正にすべきだとの意見を基に、ＯＢ＝全てＯＢ会員、ではなくＯＢはＯＢとして、ＯＢ会員は別個にＯＢ会員たる意思を表明した者でもって構成することとしまし

た。意思の表明は手っ取り早く会費納入をもって代えることとし、ＯＢとＯＢ会員との間の出入りは自由、としました。その運用の詳細につきましては、これまでにＯＢ通信でご案内しておりますので、ここでは割愛いたします。

ＯＢ会員を明確に定めると同時に、組織をより強固にするため支部を順次結成することとし、まず念願であった東京支部の結成を図った次第です。東京では、今回支部長、副支部長、事務局長をそれぞれお引き受けいただいた武富敏夫君、福永俊美君、木村均君を中心に活発に交流を重ねてこられた実績があり、機はまさに熟したとの感を抱き実行いたしました。三方のご尽力をはじめ絶大なご協力を頂いた東京のＯＢ諸氏に、厚くお礼を申し上げますとともに、東京支部が更なる発展をしますよう、改めてご協力をお願いいたします。

今後は関西、九州と支部が結成されるよう努力する所存ですが、これは一重にそれぞれの地区に在住するＯＢ諸氏の熱意に負うところ大であります。各地区、それぞれに事情があるやには聞いていますが、先輩後輩の垣根は取り払って、特に若い諸君の奮起に期待します。

山口大学ワンダーフォーゲル部の名の下に集い、目的を共有して共に行動し、青春を刻んだ仲間として、時代を超えて連帯と絆、親睦をさらに深め、またその思いを継承していきたい。

その精神を共有できる仲間がＯＢ会員として結集していただければ幸いです。

最後になりますが、東京支部発足に伴なうものや、また事務上の都合等から会則を一部改正しました。

3 YUWVOB会東京支部長より

武富　敏夫

平成６年１１月頃であったと思いますが、同期の藤下君と中洲君の取り計らいによって昭和４４年度卒を中心に会合を持つことになりました。その席上で私が幹事を引き受けることとなり、その後、年１回以上の東京地区のＯＢ会を開催し現在に至っています。

当初はあまり範囲を広げると収拾がつかなくなるという考え方から、ごく限られた卒業年度の皆さんを対象としておりました。現在では口コミにより次第に参加人数も増加し、昭和４１年度卒の木山先輩の年代から昭和５３年度卒の深田君の年代までに広がってきました。

私ども昭和４４年度卒のＯＢは、現役時代から本部と工学部の隔たりはなく交流していましたから、東京地区での会合も当初から工学部を含めたところでおこなっています。私は平成１１年まで幹事をやっていましたが、その後木村君へバトンタッチし、その間新年会、忘年会、暑気払い等の夜の部で大いに盛り上がるとともに、平成１１年からは近郊へハイキングに出かけ、下山後には温泉入浴とビールの乾杯を楽しむということが通例となって会を運営してきました。

今年の初めに東京支部を正式に発足させようとのお話があり、木山先輩や藤井君等の現役の皆さん、また従来から東京地区ＯＢ会を盛り上げてくださった皆さんのご尽力により、１０月５日東京支部が発足しました。東京支部が発足したといっても会員数が増加し会員の年齢構成が広がっただけで、基本的には今までの活動は何ら変わらないと考えています。

東京支部は、支部長武富（昭和４４年度卒本部）、副支部長福永（昭和４６年度卒工学部）、事務局長木村（昭和４５年度卒本部）の３名の役員で会を運営していくことになります。今までは本部ＯＢ会の制約を受けることなく自由に会の運営をおこなっていれば良かったのですが、今後は本部ＯＢ会と連携を取りながら東京支部の運営をおこなっていかなければなりません。

今後の東京支部の運営ですが、まず第一に東京支部会員の確定をすることが当面の課題であり、いくら東京支部の会員になろうとしても、本部OB会への加入が前提ですから東京支部への入会の意思を確認し、本部ＯＢ会費納入の督促をおこなっていきます。次にＯＢの年齢層も広範にわたることから、それ

ぞれの年代をまとめていただく幹事を選出し、上記役員と幹事とで東京支部を運営していくようと考えています。このチェーン組織は事務局長木村君の発案であり、幹事の人選および東京支部全体での活動並び各年代別の活動等の具体的な検討はこれからとなります。

これからの支部運営の基本的な検討は、役員３名でボチボチやっていこうと考えています。役員の会合の連絡は電話やメールで気軽にできるため、いつも東京駅八重洲北口を待合場所にし、居酒屋で酒と肴を前にしてやっています。このような会合の場が気軽に設けることができるのも、平成６年以降の東京地区ＯＢ会の継続的な活動があったからではないでしょうか。

現在、私が東京支部の支部長を引き受けている訳ですが、私たちの年代も第１ステージから第２ステージへの転換期にさしかかっており、東京支部の会員である年数も限られています。東京支部運営に当たっては、私たちよりも若い年代のＯＢの皆さんの協力が必要であり、早い時期に東京支部の組織と運営方法等を安定させ、一気に１０歳位若い皆さんへの世代交代をはかることも考えていかなければなりません。

いずれにしても東京支部は発足したばかりであり、今後の運営等については役員一同頑張ってやっていきますので、本部ＯＢ会の皆さん並びに東京支部の皆さんのご支援とご協力をお願いします。なお、東京支部運営にあたってご意見等ありましたら、事務局長木村まで連絡してください。

最後になりましたが、東京支部に続いて大阪や福岡の支部設立のお話があるように聞いています。各地で東京支部同様の組織が早くできるよう心から祈っています。

4 OB会会則

平成14年10月5日に行われた2002年度のOB総会で会則のほうが改正され、承認されましたのでご確認ください。太字が改正された点です。

改正　前略　平成十四年十月五日

（名称）

第1章　本会は山口大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会（略称　Ｙ．Ｕ．Ｗ．Ｖ．ＯＢ会）＝仮称＝と称する。

二　事務局は山口大学ワンダーフォーゲル部内に置く。

（目的）

第2章　本会は会員相互の親睦を図り、山口大学ワンダーフォーゲル部の発展に寄与することを目的とする。

（事業）

第3章　本会は第二章の目的達成のために次の事業を行う。

二　会員相互間の親睦に関すること。

三　山口大学ワンダーフォーゲル部に対する援助、指導助言等。

四　会報及び会員名簿の発行。

五　その他本会の目的達成のために必要と認められる事業。

（組織）

第4章　本会の会員は次の通りとする。

二　正会員　山口大学に在学中に山口大学ワンダーフォーゲル部に在籍した経歴を有し、且つＯＢ会に入会の意志を表明した者。

三　準会員　山口大学体育会ワンダーフォーゲル部員。
　　山口大学学友会ワンダーフォーゲル部員。
四　正会員たる有資格者の入会及び脱会は自由とする。入会の意志表示は会費の納入をもってこれに代え、脱会はその意志の表明で認め、総会に報告する。
五　本会に次の支部を置く。
東京
第5章　正会員は次の場合、その資格を失う。
二　会費滞納者には半期（半年）毎に督促状を送付し、督促状三回をもって自動的に正会員の資格を失う。
但し、再度入会の意志表示があった場合はこれを認める。
三　会員としてふさわしくない行為のあった者。
第6章　本会には次の役員を置く。役員の任期は二年とする。但し再任は妨げない。
二　会　　長　　一名
副 会 長　　一名
支 部 長　　一名
会　　計　　一名
監　　査　　二名
事務局長　　一名
三　会長は会を代表し会務を総括する。
四　副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはこれを代行する。
五　支部長は支部を統括する。支部はその必要に応じて幹事等の役員を置く。
六　事務局長は山口大学ワンダーフォーゲル部の直前主将が務める。
但し、直前主将に支障あるときは直前の副主将または直前主将が指名する者がその任に当たる。
七　役員の任期は一月一日から起算する。なお、任期終了後も次期役員の選出まではその任を継続する。

（総会）
第7章　総会は次の通り開催する。
二　定期総会は年一回とし、必要に応じて臨時総会を開催する。
三　総会は会長が招集する。
四　総会への出席は委任状をもって代えることができる。
五　議事は総会の出席者（委任状を含む）の過半数で議決する。

（会計）
第8章　本会に会計を設け、会費及び寄付金、その他事業収入をもって会の運営費に当てる。
二　正会員の会費は年二千円とし、五年単位の一括納入を認める。
但し、夫婦とも正会員の場合は夫婦二人で年三千円とする。
三　寄付金は一口千円とし、常時受け付ける。
四　会計報告は監査報告と併せ、年一回定期総会で行う。
五　会計は毎年一月一日をもって始まり十二月三十一日に終わる。
第9章　削除

（その他）
第10章　本会則は総会出席者の三分の二の賛成を得て改正することができる。
第11章　本会則は平成十四年一月二十六日をもって発効する。

付則　本会則の発効をもって昭和４３年十二月制定のＯＢ会則はこれを廃棄する。
二　本会則は平成十四年十月五日から発効する。

1.　支部の設置
①第四章に
「五　本会に次の支部を置く
　　東京」
を追加する。
理由：東京支部発足に伴うもの。
②第六章二の
「支部長　各一名」を「支部長　一名」に改める。
理由：支部が現在東京のみなので、整合させるため。
③第六章五の
「支部長は各支部を統括する。各支部はその必要に応じて幹事等の役員を置く」を
「支部長は支部を統括する。支部はその必要に応じて幹事等の役員を置く」
に改める。
理由：前項と同じく整合性を図るため。

2.　役員の任期の始期
第六章に
「七　役員の任期は一月一日から起算する。なお、任期終了後も次期役員の選出まではその任を継続する」
を追加する。
理由：会計年度の設定に伴い事務局長と任期を合わせるため。

3.　夫婦会員の会費割引
第八章二項に
「但し、夫婦とも正会員の場合は夫婦で年三千円とする」
を追加。
理由：夫婦で会員の場合、ＯＢ通信は一部しか送付しておらず、提供する情報量は一人分であるなど、会費は割り引く方が適切と思われるため。

4.　会計年度の設定
第八章に
「五　会計は毎年一月一日をもって始まり十二月三十一日に終わる」
を追加する。
理由：現会則では会計年度を設定していないが、慣用的に「４月１日～翌年３月３１日」としている。しかし、ＯＢ会の事務局長を直前主将（４年生）が務めているので、３月３１日に会計を締め切るのでは、４年生は卒業しており次期事務局長との引継ぎに齟齬を来たし易いため。
　会計年度に合わせて事務局長を１月１日で交代し、前事務局長が卒業するまでに引継ぎを完了する。

5.　第九章を削除する。
理由：従来からの慣用で「遭難対策基金」を設定したが、基金を積み立てても実際には「死に金」に等しくなることが予想され、むしろ「山岳保険」の利用を考える方が実用的と判断されるため。万一、遭難救助費が必要になれば、事務経費程度は一般会計で処理する。

5 山口部会について

例年1～2月の追い出しコンパの時期にあわせてOB総会を開催しておりましたが、2002年度の総会は

東京で行いましたので、2003年の1月18日に行われます追い出しコンパの前に16時より山口市の**太陽堂旅館**にて山口部会ということで会合を設けたいと思います。

2003年度のOB総会の下準備の意味合いを兼ねておりますので、山口部会とはなっておりますが、広く山口近在の方々のみならず都合がよろしければ遠方の方にもお越しいただきたく思います。参加を希望される方は表紙の事務局か会長、副会長のいずれかにお手数ですがご連絡ください。

また2003年度OB総会の方は、秋口(9～11月)ごろに何らかの行事と抱き合わせて行う予定であります。

なお、コンパの方は18時半より差し入れ開始となります。

6 OB会費

2002年度の会費の納入をもってとりあえず会員が確定いたしました。以下の方がOB会員の方でその方のみにOB通信を発送いたしております。また2002年度まで納められている方には2003年度分以降の払い込み用紙を同封しております。なお、事務の手続き上の都合により**2003年の3月末までに2003年度分の会費を納められないと、OB通信は発送されず督促状が郵送されます。**3回の督促状(2003年度のOB通信1号、2号の2回と2004年度のOB通信1号発送時期に郵送)をもって会員資格を失いますのでご注意ください。

また(2006.5)などの端数の意味はこの場合だと2006年度分は払っており、2007年度分の2千円のうち半分の千円だけ払っているということです。

7 会費振り込みについて

来年度分のOB会費を納入されてない方は下記へ納入して下さりますようお願い申し上げます。同封の郵便振込み用紙をご利用ください。

郵便局：０１５３０－０－１６０５０
山口大学ワンダーフォーゲル部

また、会費納入は1年分納入、5年分一括納入の**どちらか**で御支払い下さりますようお願い申し上げます。

1年分会費・・・・・・・・・2,000円(夫婦会員は二人で3,000円)

5年分一括納入・・・・・10,000円(夫婦会員は二人で15,000円)

※ 会費を口座に振り込んでくださる際、口座引き落としにされると当方に明細書は届くのですが、振り込まれた方の御名前が通知されず、当方で確認が取れません。払込用紙を使って振り込んでいただくと、その払込用紙のコピーが当方に届きますので、御手数ですが必ず払込用紙を使って会費を納入して下さりますようお願い申し上げます。■

7 インターネットを利用したOB会活動

◆山口大学ワンダーフォーゲル部ホームページについて

HPの管理人の藤井です。あいかわらず更新もされておらず怠惰な管理人ですが、掲示板はしっかり働

いておりますので思い出したときにでもご覧ください。

閲覧方法は代表的なのは次の３つです。

- アドレスにURLを打ち込む。
- 検索サイトから探す。
- お気に入りから飛ぶ

表紙に書いてある通り、URLは　*http://www.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~tabidori/*　です。*www*を*stu*に変えても同じです。検索サイトからは、「Yahoo!」「Google」から「山口大学ワンダーフォーゲル部」のキーワードで一発ヒットすることを確認しています。自分のパソコンで見ていらっしゃるのであれば、ツールバーの[お気に入り]-[お気に入りに追加]でお気に入りに追加することで、次からは簡単に見ることができます。

また、昨年つけられたOB会用の掲示板も活用されたら、と思います。場所は一番上のページから[OB会]-[OB会掲示板]です。掲示板にはどなたでも書き込みできますので、メインの掲示板ともどもご利用ください。

また、OBの近況報告ではちょくちょく書き込みがなされているので、OB通信に転載しますのでこちらもあわせてご利用ください。■

◆Eメールでの OB 通信発送

今回からまたＥメールでのOB通信の発送を行います。新たにＥメールでの発送を希望される方は、事務局まで（tabidori@yamaguchi-u.ac.jp）ご連絡ください。

＊　すでに希望されているかたはご連絡する必要はありません。

現役部員近況報告　＜本部編＞

1　2002 年度夏合宿報告

今年の８月２８日から９月１日にかけて、北アルプスにて夏合宿を行いました。今年は部員全員で１パーティーを組んで行ったため１０名という人数になってしまいました。自分はこれまでこのような人数で山行したことはなく、またPLという立場でもあったため自分自身が合宿に対して言い知れぬ不安と戦っていました。しかし、PWや錬成を通じてP-men達の頼もしさというものを実感しました。実際の合宿でも部員全員、特に一年生にとっては有意義なものであったかと思います。

アプローチ

先輩方に見送られながら始発の列車で湯田温泉を出発。途中の小郡駅では県大の方にも見送っていただきいざ新幹線で名古屋へ。名古屋からは特急に乗り、飛騨高山までは緑あふれる景色が時折見られました。そしてバスにゆられながら山道を登って行き、アルプスの玄関口の一つ「新穂高温泉」に到着しました。テン場まで行くと急に大雨が降り出し、大急ぎでテントを設営しました。管理の人の話ではこの日２度目の夕立だったそうです。エッセンを食べる頃には雨はやみ、晴れ間も覗いて明日への希望を予感させてくれるものでした。

一日目

冷えこんだ朝、しかし今日一日天気はずっと晴れていました。テン場から一旦バス停まで下り、旅館街から左俣林道へ。この日は一気に稜線上の双六小屋までアップするハードな行程でした。左俣林道に入るとすぐに左手に笠ガ岳の稜線を見ながらの快適な山行となりました。ワサビ平小屋を過ぎ緩やか

に登った先に小池新道登山口。ここから本格的な登りが始まりました。大きく開けた谷の登りで時折これから行く稜線を一望する事ができ、自然の雄大さを感じることができました。しかしいつまでも急登続きで、晴れ間も助かって大幅にペースダウンしてしまい、結局稜線手前の鏡平山荘で一泊する事を決定しました。
P-men にもう少し気を配るべきであったことを自覚しました。ここではほとんどの P-men が初体験となる小屋泊となりました。自分を含め快適に睡眠することができ全員が明日の山行に備えました。

二日目

今日は予定を変更し、双六小屋まで行きさらに２日目の行程を行うことにしました。涼しいうちに稜線まで登り、予定時間通りに双六小屋に到着。途中の弓折岳鞍部からは槍ガ岳をはじめ穂高連峰が望め、P-men 達はしばらく見入っていたようでした。小屋で手続きを済ませテン場に移動。サブザックに代えて双六岳を目指しました。急登を登りきると
広大で平坦な台地にかわり目の前には双六岳が姿を現していました。双六岳に着くと３６０度の展望が広がり、裏銀座の山々や槍ガ岳など北アルプスの代表的な頂きを見る事ができました。この合宿中で一番の自然美を感じました。下山は山腹を巻く中道コースを取りました。途中には小屋の水源である雪渓があり、貴重な水資源をどのようにして得ているのか、いかに水が大切かということを全員目の当たりにしました。

三日目

朝３：００に起床。しかし昨日の夜から続いていた強風が朝になっても止まないため、今日の沈を決定。P-men も昨日までの疲れが取れていない様子でした。一日中晴れてはいたが強い風は時折吹いていて、他のテントが横になって飛んでいきそうな勢いでした。
ひしひしと台風の接近を感じました。ただ P-men は各人きままに一日を過ごし、疲れは取れたように見えました。

四日目

前日に作成した天気図には朝鮮半島の東を北上している台風がありました。風のほうも徐々に長い間吹くようになってきました。これからの行程は強風時危険な場所であるため下山という判断をしました。後々思えば少々慎重になり過ぎたのかもしれません。全員で来た道を引き返しました。途中鏡平で各自思い出の一品を買ったりしました。昼過ぎには新穂高温泉に帰ってきました。そして今年の夏合宿は幕を下ろしました。

夏合宿を終えて思うことは、何をするにも勇気をしぼらなければならないことです。沈をすること、予定を変更すること、何においても一つ一つの事で合宿は変わってきます。今回の合宿では P-men 達にとって本当に有意義であったのか、自信を持っては言えません。確かに様々な体験をして P-men には良い経験となったと思います。自分は PL として責任持って全員を無事下山させられたことは良い人生の教訓となりました。しかし P-men には舞台を作ってあげることしかできません。今回を含め今後個々で何かしら自分のためになる何かを見つけていって欲しいと思います。最後に、連絡先をしてくださった先輩方、いろいろと助言を頂いた先輩方本当にありがとうございました。

PL：　藤田　康雄

＜コースタイム＞

１日目　新穂高 ――― バス停 ――― 途中 ――― ワサビ平小屋 ――― 途中
4:00　4:05 / 4:10　4:56 / 5:12　5:54 / 6:12　7:05 / 7:22

秩父沢 ――― 途中 ――― ｼｼｳﾄﾞ手前 ――― 途中 ――― 鏡平小屋
8:03 / 8:20　9:06 / 9:24　10:20 / 11:17　11:53 / 12:14　12:44

５：５５　計９本

２日目　鏡平 ――― 途中 ――― 2756 過ぎ ――― 双六小屋 ――― 途中

5:00　5:45 / 6:00　6:47 / 7:05　7:43 / 8:25　9:16 / 9:32

双六岳 ―― 中道途中 ―― 双六小屋
9:40 / 10:45　11:21 / 11:36　11:56　*４：０５　計７本*

３日目　沈
４日目　双六小屋 ―― 弓折岳鞍部 ―― 鏡平山荘 ―― 途中
6:00　7:01 / 7:21　7:57 / 8:27　9:13 / 10:03

秩父沢 ―― 登山口過ぎ ―― ワサビ平小屋 ―― 新穂高温泉
10:38 / 10:55　11:41 / 11:58　12:08 / 12:22　13:17

４：４９　計７本

山中３泊４日（沈１日、小屋泊１日）
総コースタイム　１４：４９　総計２３本

2　2002 年度 1 年生合宿報告

今年の 9 月 5 日～7 日に美ヶ原にて一年生合宿を行いました。1 年生しかいないこともあり、不安ではありましたが、逆にそのことでのびのびとできたこともまた事実です。P-men も積極的に自分の係の仕事をしてくれて初の責任者で初の PL である自分としてはとても頼もしく思えました。オッチェン五人という男一色の Party でしたが、日々のトレーニングや 2 回の錬成などのおかげで常時パワフルな山行を楽しむことができました。

AP(9/5)

夏合宿が終わりついに一年生合宿に出発する日が来ました。4 日間過ごした県の森に別れを告げ松本からバスで美ヶ原に向かいます。期待を膨らませる 5 羽の旅鳥たち。

三城バス停で下車、テン場の広小場へ。沢沿いを縫って進むうちに無事到着し寝床のテントを設営します。下山してこられた登山者の方と挨拶を交わし、一段落して全員である差し入れと格闘。その名はココナッツ。ナイフを駆使して何とか処理。味のほうは賛否両論(？)、初めて味わう不思議な味でありました。そうこうしているうちに就寝時間。明日の山行に備え今日ゆっくり休みます。明日が楽しみです。

1 日目(9/6)

この日は曇り。晴れて欲しかったが仕方がない。我々は日程どおりに山行を行うだけです。先ずは美ヶ原最高峰、王ヶ頭へ。コースタイムの半分で到着すると 5 人はハッスルします。しかしガスのためろくに景色も見られません。休憩もほどほどに王ヶ鼻ピストン。曇りのせいかやたら寒かった･･･。

本日にのメインイベントは牛です。その昔、牛に塩を与えていたことから名がついた、塩くれ場の道中、数頭の牛に出会いました。恐る恐る触ったり写真を撮ったりしていると、見事にやってくれました。う○ちです。ボトボトと目の前で。これには Party 皆で笑いました。カーブの連続が続く百曲がりを通り下ります。スピードが速かったのですが全員オッチェンのため、きついとは言い出せず意地でまたまたコースタイムの半分で下山してしまったのでした。テン場到着時の感想は全員「きつかった」でした。
午後雨が降り出しました。山に来て雨が降ることほど空しいことはありません。最終日は明日です。せめて明日は晴れで･･･。

2 日目(9/7)

美ヶ原で唯一車では行けない場所、茶臼山に今日は登ります。天気は結局曇りです。ついてないですね･･･。しかし、この曇りとは晴れの日とは別の感動を与えてくれるものだったのです。茶臼山につくとそこには壮大な雲海が広がっていました。上も下も一面雲。雲海から突き出す山は、さながら絶景の孤島

のようです。P-men も大興奮、そして大絶賛でした。
　しばらくこの景色を眺めてから今日も塩くれ場へ。牧場の中の道で草原を歩いていきます。ここが、牛のう〇ちの散乱場だと気付いたとき、ソレに周囲を囲まれてました。足元に注意しながら進みます。塩くれ場につくと牛伏山をピストン。丘のような山で途中の美しの塔の方が印象に残りました。あとは下山です。テンバの広小場でテントを撤収、そして、三城バス停へ。これで合宿終了です。バスが来るまで何ともくつろいだ時間を過ごしたのでした。

振り返るとこの一年生合宿は P-men を楽しませることができたのではないかと思います。むしろ自分自身が P-men に本当に楽しませてもらいました。一年生だけのこの合宿で少しは山での技術は向上したのでしょうか。確かに一年生の親睦は深まりました。が、他に変わったことは何かないのでしょうか。得られたもの、P-men 達には何かしらあるのかもしれません。いろいろな山に行く度に何かを得られたなら、それは幸せなことだと思います。
　助言やいろいろな準備を手伝ってくださった先輩方、お忙しい中を本当にありがとうございました。合宿の成功もその御力添え無しにはありえませんでした。重ねて御礼申し上げます。

ＰＬ　生田　将吾

―コースタイム―

＜一日目＞

広小場 6:00 → 王ヶ頭 7:49/8:03 → 王ヶ鼻 8:23/8:34 → 塩くれ場 9:48/10:09 → 広小場 10:37

計　7本　3:06

＜二日目＞

広小場 6:00 → 茶臼山 7:07/7:27 → 美しの塔 8:07/8:21 → 牛伏山 8:47/9:50 → 広小場 10:40/12:15 → 三城 12:36

計　6本　3:14

総コースタイム　一泊二日　総計 13本　6:20

3 42期執行部近況報告

　冬の寒さのほうも深まっていく中ですが、去る 12月8日に行われた学長杯争奪駅伝大会ではその健闘をアピールし、部員全員寒さに負けず部活動に励んでおります。しかしながら、部員の人数も減少しているのが現状です。一年生１人、二年生２人が部を退いてしまいましたが、人数に負けず今後も頑張っていきたいと思います。なお、執行部を務めていた多々納が諸事情により、11月に執行部から脱退いたしました。このことに関して、部員および先輩方には多大なご迷惑をおかけし、部を運営する立場として、深くお詫びいたします。

	4年生	3年生	2年生	1年生	
オッチェン	3	2	2	4	11
メッチェン	2	0	1	0	3
計	5	2	3	4	合計　14人

◆ お知らせ

　この度１２月を持ちまして、現在の第４２期執行部が幹部交代することとなりました。これまで

２名で運営してきましたが、３月に行う春合宿における責任者を４２期執行部の自分が、私的諸事情のため担うことができなくなりました。よって来期執行部となる現２年生と相談した末、このような形を取らせていただきます。今までご迷惑をおかけした先輩方に深くお詫びするとともに、今後、よりよい部活動へと向かっていくことを切に願っております。

本部第42期主将：藤田　康雄

4 2003年度春合宿紹介

はじめまして。２００３年春合宿においてPLを務める植本　洋です。まだ、2年生であり、僕自身初めてのサバイバルであるので、不安もありますが、素晴らしいものに出来るよう全力を尽くしていく所存です。ところで、僕らが目指すのは鹿児島県の南の小さな島です。トカラ諸島にある小宝島という所ですが、1周約３０分。住人は約４０人。サンゴ礁と亜熱帯植物が景色をおりなすのんびりした所です。でも、気を付けないと。そこらの藪や茂みにはトカラハブがとぐろを巻いているかも知れません。

この度の春合宿は、この離れ島で釣りをしたり、貝を取ったりして、自分たちの作ったかまどで料理し、約５日間生活していこうというものです。ほとんど食料を持って行きませんので、辛いものになるかもしれませんが、こんな経験はなかなかできるものではありません。未熟ながら合宿成功を目指し、P-ty一丸となって、盛り上げていきたいと思います。

現役部員近況報告　＜工学部編＞

1 工学部近況報告

８月後半から私たちは、3年生のみの３人で活動しております。残念ながら、期待の星であった２年生はちょっとした問題を起こしてしまい部活動を禁止されてました。よって、夏のFWから今現在(11月)までの活動には参加しておりません。しかし、その禁止は最近になって解かれましたので、もしかしたら戻ってくるかもしれません。

今、心配なのは来年のことです。今の工学部には、2年生がおらず、1年生が１人という状態なので、このままいくと来年の工学部は２年１人となってしまいます。私達は例年どうりにいくと今年が最後の現役活動となるのですが、そうもいかないようです。部員の減少は今私たちにとって、大きな問題となっています。

ここからは、夏以降の活動を簡単に書くことにします。

まず、夏合宿ですが、合宿直前にSLを失い、計画していた北アルプス裏銀座縦走は中止となりました。しかし、これまで時間が合わなくてもなんとかトレや講習会を重ねてきたというのに、3年からこの工学部ワンダーフォーゲル部に入部してきてくれた部員に対して、このままどこにも行かずに夏が終わるのはあまりに残酷の気がしたので、FWをたてることしました。場所は２人の強い希望より北アルプスの槍ヶ岳となりました。１泊２日の短い山行でしたが、それぞれ感動があったと思います。

今年は天候に恵まれ、10月26・27日には80Km耐久徒歩を行いました。

11月16・17日は大山へ、雪上訓練の下見として行って参りました。もう頂上にはかなりの雪が積もっており、天気もよく皆で絶景を楽しんできました。

後期に入り、工学部３人は夜間授業が減ったにもかかわらずますます忙しくなってまいりました。２人の男性部員は今膝をこわしています。なかなかトレの時間がとれませんがこの膝をカバーできるような足の筋肉作り、体力作りに励んでこの冬は活動していくつもりです。

工学部代表　柴崎　洋子

2 2002夏FW報告

工学部近況報告に述べたような理由で、今年は合宿ではなくFWとして8月28日～31日に１泊２日で北アルプスの槍ヶ岳ピストンに行ってきました。

APは28日の23:28厚狭駅発の夜行列車で京都まで行き、乗り換え、名古屋まで。ここまでは青春18切符を使い、名古屋からはバスを使い、のんびり２日かけ新穂高温泉まで行きました。

１日目、新穂高温泉―白出沢出合―滝谷沢出合―槍平小屋―飛騨乗越―槍岳山荘と行く予定でしたが、槍平小屋についたのが10:22だったのでこの日はここでキャンプをすることにしました。昼のエッセンを皆で食べ、天気のいい中、山に囲まれ、日陰でのんびり３人で雑談し、昼寝をし、楽しく過ごしました。

２日目は槍平小屋から槍ガ岳をサブザックでピストン。この日も天気はとてもよかったです。槍岳山荘までの急な登りもサブザックだったため割と楽に行けました。槍ガ岳の岩場はスリル満点でした。少し寒かっですが、槍ガ岳山頂で何にも遮られず景色を満喫し、昼のエッセンを食べました。それからはひたすら下りです。少し遅い時間に新穂高温泉に着き、３人で無事に下山できたことをビールで祝いました。疲れ果てていた私はすぐにシュラフにもぐり込んでしまいました。男２人はその後温泉に入り、またもや冷たいビールを思う存分堪能し、いい具合に酔っぱらい床についたらしいです。こうして私たちのＦＷは終わりました。

私は彼らと30cmと身長差がありコンパスが短いせいか、単に心肺機能がついていってないだけなのか分からないですが、登りも下りも２人について行けず、体力の差を思い知らされたＦＷとなりました。あまりに遅かったため、途中ＳＬさんの機嫌をそこねさせてしまったり、行程の区切りを変更し２人には迷惑をかけてしまいました。

４日間共に過ごし、私たちは互いにかなり親密になれたと思います。よく笑い、怒り、そしてまた笑い、会話の絶えない４日間でした。

ＰＬ　柴崎 洋子

3 2003年度春合宿紹介

今年の工学部の春合宿は、西表島での７泊８日の合宿を予定しています。１日目は大原を出発し大富、展望台を経て第１小屋跡へ行きます。２日目はマヤグスクの滝を見て第２小屋跡へ行きます。３日目はカンピレーの滝からマリユドゥの滝へ行きます。マリユドゥの滝からは木々

が生い茂るジャングルを歩いて軍艦岩まで行きます。そこからは船で浦内橋まで出て、星砂の浜へ行きます。4日目は浦内橋、祖納を経て白浜へ。5日目はウダラ川河口から鹿川へ行きます。6日目は別れ浜、7日目は南風見田の浜へ行きます。そして、最終日8日目は出発地大原に戻ります。今回の春合宿ではイリオモテヤマネコと会うことができたらいいなと思ってます。
　この春合宿を楽しいものにするためにも、しっかりと準備を整えていきたいと思います。

PL　小松　敬幸

第３６回８０ｋｍ耐久徒歩について

10月26、27日に、80Km耐久徒歩が行われました。今年も天候が悪かったにもかかわらず、本部役員、ドライバーや、先輩たちの協力によって無事に終わることができました。
26日の昼ごろは雨が降っていましたが天気予報では27日は雨が降らないということだったので予定通りドライバーの車に乗り萩の川島公会堂へ向かいました。
17：00くらいになると参加者が集まり始めました。また、このころには雨もやんでいました。仮眠をとる前にパーティごとに集まり、自己紹介をおこない、19：00から全員仮眠を取りました。そして、23：00より開会式を行い27日0：00より萩川島公会堂を出発し、宇部工学部へ向かいました。途中小雨が降りましたが、7：00無事に道の駅美東へ着くことができました。ここで、弁当を食べた後にマイペースで工学部ゴールまで向かいました。途中小雨が降りましたが、道に迷うことなく参加者全員無事工学部へ到着し18：00より閉会式を行うことができました。
今年は、本部現役2年生の植本洋君が見事優勝しました。2位は1年生ながら本部の井手口謙三君が、3位は工学部ＯＢの原和義さんでした。また、女性1位は本部2年生の川口恵子さんでした。 寒い中最後まで歩いた参加者の皆様、残念ながら途中でリタイアしてしまった人も良い思い出になったと思います。
最後に、寒さで震えながらチェックポイントで参加者のチェックをした本部役員、徹夜で眠い中何度も巡回してくださったドライバー、ならびに開催に当たってさまざまな助言をしてくださった先輩方、本当にありがとうございました。
来年80K耐久徒歩を行う際にはたくさんの方に参加していただきたいと思います。

第36回80K耐久徒歩実行委員長　村田　隆行

近時片々

新設しました。何でもアリ、の欄です。OB通信の中の交流の場、と思ってください。グループや個人の山行記録(メモで結構です)、消息、日常のちょっとしたこと、折々の感想・・・・・。事務局または会長、副会長宛にお送りください。はがきでもE-mailでも結構です。
また、ワンゲルのHPのOB会の欄ももっと活用してください。掲示板に書き込んでいただければ適当に採録いたします。

メールより

北アルプスス珍道中記

木山克彦（昭和４２年３月卒）

「北アルプスを歩こうか」と学生諸君に言ったのは５月頃だったでしょうか？

OB会の前現両事務局長（崎間君、藤井君）など現役の人にはお世話になった（なる）ので、我が家で四年生のお嬢ちゃん二人（村井君、吉村君）を交えて豪勢（？）に焼肉パーティーを催した時の事である。
結局、この焼肉パーティーの時のメンバーは崎間君一人のみ参加だったが、彼が他に呼びかけ４人（崎間君、佐伯君、姫野君、木山）と成ったのである。
テント、コッフェルの大きさからして、５－６人位までではOKなので、人数が多ければ共同装備の一人当りの重量は少なくなるので大歓迎だ。
其の後、姫野君は三俣山荘で８月始めから９月２５，２６日位までバイトをする為、途中で休みを貰っての参加で松本駅で合流する事になった。
出発一週間前頃になって、工学部の合宿がひょんな事から中止となった為、これに参加予定だった柴崎君が急遽合流する事となり総勢５人である。
但し、柴崎君は合宿で行く予定だったので未練も有ったのか、８月の終わり頃に槍ヶ岳にフリーで行く事になっており、これまた松本駅での合流である。
現地集合型で老若男女の即席混合の異色なパーティーであるが、ちょうど良い人数である。
こりゃ一面白くなるぞ。

２００２／９／２（月）
８：００小郡駅新幹線口１Fに５人分の荷物を持って崎間君、佐伯君、木山の３人が集合し、山口から駈け付けてくれた田部君、下村君ご両人から見送りと、差し入れを頂いた。
有り難いことです。
後から聞いたのだが、崎間君、佐伯君の二人は湯田温泉駅からJRに乗っており、此処でも見送り、差し入れを貰ったとの事だが誰からかまでは聞かなかった。（持ってきた人御免な）
フムフム、そうかそうか、皆なに感謝感謝。
神戸で乗り換え、名古屋まで。
名古屋から中央線に乗り継ぎ、松本駅着。
程なく柴崎君が姿を見せる。
小生はこの時が初対面と思ったのだが、彼女は自分を知っていると言う。
小生も有名になったものだなぁ。
彼女曰く、今年の１／２６太陽堂旅館での追い出しコンパ、ＯＢ総会の時に出たので、其の時偉そうに上座に座ってパイプを吹かしていたので知っていると言う。
小生からすると、この席では県立大、高専を始めとした他大学、又他の部からもあんなにワンサと次々に人が入って来ると、何が何だか、誰が誰だか解らん様に成っていましたので、こんな事になってしまったのです。
良く経験する事ですが、相手が知っていて此方が知らないと言う時ほどバツの悪い事はないのですよねぇ、皆さんそう思いませんか。
以後気をつけて物を言うことにしようと反省しきり。
失礼な事をしたものだなぁ。
彼女の話だと、姫野君とは昨日新穂高から松本に来る時に一緒のバスだったとの事。
姫野君は三俣山荘から一旦新穂高に下って松本で合流し、高瀬ダムから烏帽子岳に登り、裏銀座を歩いた後、再び三俣山荘に戻る事になっており大変です、彼は本当に来るのかなぁ、と一寸心配でしたが、これで少し安心したのは偽りの無いところです。
打ち合わせ時に「もし来なかったら罰金だよ」と言っていたし、荷物の分担が大きくなるので大変です。
彼は今、映画を見に行っていると言う。
そうこうする内に山大のワンゲル部員がぞろぞろと見えて、差し入れと称して美味そうな物を沢山貰ってしまった。
聞けば、合宿が終わって昨晩「県の森」に野宿し、これからフリーワンとの事。
その合間を縫っての差し入れである。
感謝感謝。
列車の出発時間が迫るも姫野君がまだ来ないのです。
「はぁーやく来い、来い姫野君」

出発５分前位にやっと彼が現れる。
ギリギリに来る辺りは大人的風格を持ったスケールの大きい彼だけに、其の分他人には気をもませる物でもある。
でも、これで予定通り全員揃った、一安心。
大糸線には以前武富君と常念―蝶を歩いた時に乗ったが、単線であり数年前に豪雨、土砂崩れで一時は不通になっていた線で、列車の行き先は「南小谷」である。
これを「ミナミオタリ」と読む。
この一帯の呼び名には独特の面白さがあるのは、どのような歴史的、民族的な流れが有るからでしょうか。
司馬遼太郎の「街道を行く」の何処にもその考察は見当たらず、どなたかご存知の方お教え願いたい。
信濃大町駅前からすぐタクシー手配。
リュック５個を無造作にトランクに積むおっちゃんが運転手。
危ないなぁと思って「落ちないかい？大丈夫かい？」と聞くと、いとも簡単に「大丈夫，大丈夫」と言う。
登山客は多く来るので、手馴れたものなのでしょうが…、ややいい加減な人であるらしい。
ところがどっこい、「上手の手から水が漏れる」と言うではないか。
３０分程度走り、トンネル手前のゲートから先はタクシー２台に分乗する必要があるらしく、（理由：トンネル所有者は東電で、通行に関する権益との関係と恩うが、真相は不明です）乗り換えのために降りて車のトランクをみると埼間君のザックが行方不明なのです。
トランクから落としたのだが、ホラ見たことか、「だから大丈夫かい」と言っただろう。
運転手の表情は硬かったが、崎間君の表情が以外にも明るかったのは、古い装備品が保険で新調出来るから寧ろ良かったと思っていたのでしょうか？
その時にはこんな薄情な事は本人には言えませんでしたが…。
御免、御免、「キリスト教では言わなくても思ったら罪」と言います。
当然だが運転手はすぐ荷物探しに引き返す。
一時間ばかり経って、警察に届けられていたザックを積んで帰ってきた。
この間今後の行動計画の変更を考え、差し当り今日のテンバは此処と決め探しておいた。
「今日は此処に泊って、明日近くの町に出てザック、シュラフなど崎間君の個人装備を揃え、失った共同装備、食料を点検し、必要な物を補充して動こう」、「こんな場合タクシー会社への補償の持ち込みは何処まで、如何すれば良いのかな」と思案。
そうすると、日程がオーバーするし何処の行程をカットして…、と考えるも、まだ失ったと決った訳でもなく、疲れも手伝って半分ボケた頭では充分纏まらないのです。
荷物も揃った、さぁ行こう。
車はロックフィールドの高瀬ダムを大きくジグザグに蛇行しながら登り詰めて終着点。
荷物が戻ってきたので５００％以上の冗談で後になって言えた事だが、共同装備と食料を揃えて彼をそのままおいて行くという選択肢も有ったねぇ。
この選択肢を冗談めいて言った時に、姫野君は「そんな選択肢も有ったのかぁ」と大いに感心していたようだが、言っておきますが幾ら年の功と言っても、見つかるまではそんな事は微塵にも思わなかったのですよ、姫野君。
車を降りた後に長いトンネルを潜り抜けて今日のテンバの濁り沢に着いたのは１８時を少々廻っていたかなぁ。
運転手さんよ、あんたのお陰で今日は相当に神経が疲れたよ、ホンマにもぅ…。

２００２／９／３
さぁ、愈々今日はアルプス三大急登のブナ立ち尾根を烏帽子小屋までですぞよ。
キャンプ場を５：３５に出て５分歩き、行動中の水の補給で水場に寄り、５：５０出発。
NO １２の表示から愈々急登で、歩きにくい金属のはしご風の階段などを経て、６：１１、NO １０手前で小休止、ハァ、ハァ、ハァ、朝の一本目はきついなぁ、年かなぁ。
此処の登りには数字の表示が有って、登り口地点がNO １２で、烏帽子小屋がNOゼロ、標高差約１２００ｍ強を登るのです。

高低差毎の表示か、距離の表示かは不明でしたが、数合わせで推理すると標高差でしょう。
場所によっては札が小さく、又見にくい所に有って見落とした所も有ったんです。
６：２８分出発。
トップを引く小柄な柴崎君はぐんぐんと高度を稼ぎ、リュックの重い崎間君、佐伯君、姫野君の３人と、リュックは軽くとも足の骨折からまだ二年経過の身で、還暦もそう遠くない木山さんは遅れ気味で、ヒーヒー言いながら何とか付いて行く。
６：５９、NO ９手前で小休止。
小休止と言っても大休止と変わらない。
昔のようにガツガツと時間に追われて、行程を消化する事だけを最優先する登り方なんてするものじゃないよ。
「いいぞ、いいぞと煽てられ、死に物狂いで来て見れば、……」の新人哀歌を思い出す。
山は味わい、味わい登るものだよね、うん、そうだよ。
いやいや、休憩時間のほうが行動時間より長い事も大いにあり、年を重ねるとこんな歩き方の方が良いねぇ。
今回の計画はタイトル「**のんびり、超ゆっくり北をあるこうかい（会）**」で、充分に時間配分を考慮した計画ですから、幾ら大休止を取っても全く気にならんし、柴崎君の得意とする甲羅干し（岩上昼寝）も全く問題なく OK です。
７：２５出発。
NO ７に７：５２着、休憩、８：１１発。
NO ６手前に８：３０着、休憩、８：５６発。
此処で姫野君は大のキジ打ちに行く。
恐らく勾配が相当ある所で木に掴まりながらのキジ打ちになろうが、こんな所での打ち方を「手長猿方式斜め打ち」と言うそうです。（木山命名）
彼は度々大キジを打つ人ですが、１日に１度程度で済まないのは銃の口径が狭く、且つ口径が螺旋状に成っていて、固体（流体）力学的にみて問題が有り、１回当りの流量というか噴出量が少ないのかも知れませんね。
費用対効果から考察すると、玉（ペーパー）が多く要るので非効率なのでありますが…。
NO ５に９：３０着、９：５３発。
NO ４手前に１０：４０着、此処では一時間休憩し、昼飯を取って１１：４０発。
NO ２を一寸過ぎた地点に１２：１２着、３６分間休憩。
１３：２０烏帽子小屋着、遂に来たぞ縦走路の入り口に。
先に小屋に着いた佐伯君が死ぬほど水が飲みたいと言っていると聞く。
写真を取る為に小屋まで２分程度手前の鞍部風の場所で崎間君,姫野君,木山さんがゆっくりしていた所に、如何したのかと様子を見に引き返して来た柴崎君が言うのである。
最後の取っておきの水を差し出し、佐伯君に飲ませるように、とボトルを渡す。
活き返ったかい、佐伯君。
途中で烏帽子岳や偽烏帽子岳がチョコチョコ見られました。
一日を通算して歩いた時間と休憩時間がほぼ一対一ですが、良いねぇ、こんなの。
皆さん、この歩き方を参考にされては如何ですか、疲れませんよ。
烏帽子小屋の水は有料で２００円／L、テンバ費用は５００円／人。
小屋には徳山からの夫婦がいたし、北海道から来たと言う中年の女性三人組は同じテンバ。
この三人組は札幌、旭川に住んでいる山仲間と言うので一寸話をする。
小生が中学校時代にお世話になった池永先生は、４０年近く前に北海道の標茶高校の教師として山口から移られ山岳関係で活躍されていたが、現在は教師を定年退職して、大雪山に近い所で自然指導所（と言ったかな？）の所長に付かれている。
老後の社会貢献でしょう。
NHK で大雪山の紹介時にテレビに出ておられたのを見たのです。
この人の話を出した所三人とも良く知っていると言う。
日本は広いが世間は狭いねぇ。

山口の木山と言いますが北海道に帰られたら宜しく伝えてください、と伝言する。
こんな話は大体伝えて貰えないものですが、世間には礼儀というのも有るのでねぇ。
さてさて急登の一日も終わり、死んだ真似に入ったのは何時だったろうか？

２００２／９／４
５：１８烏帽子小屋を出て、烏帽子岳をピストン。
ピストンは若者四人に任せて、老人はじっくりとキジを撃ち、三ツ岳、野口五郎岳方面の光景や赤牛岳をカメラに収め、七かまどの実の紅とハイ松の緑とをマッチングさせ、何とか綺麗に写そうと朝の太陽光線を見計らってはパチリ、パチリとやっていました。
そうそう、今日のテンバの野口五郎小屋は８／３１で閉鎖し、明日到着予定の雲の平まで水は無く、途中の水晶小屋は雨水ですから充分な量ではなく、通過者には有っても分けて貰える保証は無い。
水晶小屋の先の岩苔乗越から黒部源流側に下れば水は得られるとの姫野君の情報があるが、一旦下ると又登らんといかんのでこれも辛い。
いざと言う時には、水晶小屋は姫野君がバイトをしている三俣山荘の経営者と同属だから、この絡みを上手くこじつけて、姫野君に交渉させると言う腹案を持っては居たのです。
水と引き換えに姫野君を引き渡す戦術もあるし、そう考えると彼は人質みたいな物だから、大事にせんといかんし、彼の大キジ打ちの回数が多い位の事は何でもないね。
烏帽子小屋で二日分の水を補給し、行動中の水は大事にし、野口五郎小屋前での泊まりでも極力水を節約する工夫、必要がある。
小屋で貰った焼酎の空きボトル（商品名は大五郎　２．７Ｌ）も利用して合計約１９Ｌの水を持って行動開始する事にした。
烏帽子岳に行った若衆が帰ってくる迄に空のタンクに水を満たしておこう。
空のタンク６Ｌ分の水を買いに行く、小屋のおっさんは１Ｌ分の料金（２００円）をサービスしてくれた。
そりゃそうだ、タダ同然の雨水だもんね。
そうこうする内に若衆ご一行が帰還して、ピストン時に使って空になったタンクに水を補充する。
８：４０テンバ発。
三ツ岳中腹９：１２着、休憩し９：３９発。
３０分歩いたので１０：０９小休止を取り、１０：２８発。
ピークはダラーとしていて何処かも解りにくく、直ぐ其処とは知らずに手前で小休止したが、４分後の１０：３２に北峰に着く。
１１：１９出発し、三ツ岳西峰を過ぎた所に１１：４８着。
此処で１２：４８迄１時間ばかりゆっくりする。
昼食を此処ら辺りで取ったが、正確には何処だったか忘れてしまった。
三ツ岳は名の通り、ダラーとした広い所に一寸盛り上がったピークらしき物が三ツ有るが、広いこの一帯を総称しての事だろう。
コブ手前に１３：１１着で、１３：３９発。
野口五郎小屋１４：１２着。
今日の佐伯君は昨日に比べて随分調子が良さそうでしたが、ザックは軽くなったのかな。
小屋はすでに閉鎖で水は無い。
適当な所をテンバとして見つけたが、小屋の周囲をフラフラしている内に、狭い空間だが一時的に避難して宿泊に利用できる様な屋根裏風の空間があり、ピンを外せば簡単に扉が開くではないか。
雨が心配されたので、こりゃ大いに助かったね。
中には玉ねぎ、サツマイモまで有る。
今日の献立に利用できるが、これに手を付けるのは流石に気が引ける。
今でも未練がましく思うが、玉ねぎはまだ良いとしても、サツマイモは蒸かして食べたかったね。
繊維タップリだから、便秘気味だった柴崎君もこれを食べると、次の日から大の花摘みがスムースとなり楽だったかも知れませんね。
こりゃ失礼。

暗くなる一寸前になって１人の男がテンバ方面からやって来るではないか。
「小屋を無断で使っては困るじゃないか」とお小言を頂いた上に、それなりの代金の請求が来るとの予感がした。
仕方が無いからそれなりの代金を払おうと覚悟は決める。
この男は片手に５００ｍｌのペットボトル１個を持っており、水を分けてくれと言うのである。
考えてみてくれよ、水は烏帽子小屋で買って、皆なでヒー、ヒー言いながら持ってきた貴重な水だよ。
しかも自分達は行動中に飲む量も抑えて節約しながら持ってきたし、手持ちの水は今夕用、明日の朝食用、行動用、昼食用までの量だし、この先どんな事に遭遇するか解らないし、リスクを考慮すれば、多少余る位は持っていて当然の大事な,大事な水だよ。
一応「烏帽子小屋で買ってきた水だから…」と少ない事を遠まわしに言って婉曲に断るが、この男は鈍いのかなぁ、話を理解しないし、通じない。
余程の事なのでしょう、今度は売ってくれと言う。
金を出せば片が付く事ではないよ。
しかし、其処まで言われては仕方が無い、「幾ら欲しいの」と聞くと、１Ｌ位と言う。
変な人だなぁ、５００ｍｌのペットボトルを１つ持って１Ｌ欲しいと言う。
最近の技術では水を圧縮して容積を減らす事ができるのかいな？そんな筈は無い。
後の５００ｍｌ分は靴の中か、頭蓋骨を外してお椀状にして、その中にでも入れるのかと言おうと思ったが、金持ち喧嘩せず。
「１Ｌだね」と念を押して５００ｍｌのボトル２本を渡した。
付け加える事、お金は不要ですと。
此方が要らないと言っても、普通はいやいやそんな訳にはいきませんと言って、こんな時には1,000円位はおいて行くのが常識だけどねぇ。
気持ち良かったね、偉いねぇ、なぁ、こんな快挙は久しぶりだよ。
この人は充分な水の準備もせずに、よくもこの山深くまで入って来たねぇ、地球の裏側から尊敬してしまうよ、全くもぅ。（裏側と言うのは反対の意味を指すのです）
この人は次の日には山中で一度も見なかったし、水が無くては前進できない所だから、そのまま来た道をトホホホホ…と戻ったのでしょうね。
ご苦労だが其れがよし、其れがよし。
基礎から出直しだね。
あぁ今日も疲れた。
でも今日は小屋だよ、良い気分で寝られるでしょう。
さぁ死んだ真似、死んだ真似。
明日は一寸ばかり歩き甲斐が有る行程だよ。

２００２／９／５
今日の行程は少々ハードだよ、気を引き締めて行こうな。
５：３３野口五郎小屋発。
野口五郎岳ピークに５：４７着で５：５４発。
辺りはガスで見通しは悪く、ご来光には恵まれず、雲行きは怪しい。
その分暑くなくピッチは上がる。
真砂岳への取っ付きを過ぎ一寸した鞍部に６：３０着。
６：４８に出て、東沢乗越手前のガレ場に７：２０着、７：３３発。
途中では曇っているのにサングラスを掛けたギャング風で単独行の外人（欧州系）とすれ違う。
英人か独人と勝手に決め込んで空かさず、「Good morning! Guten morgen!」と二ヶ国語をチャンと使いこなす。
此処から彼の行く先にはロープが張られてはいるものの、スリップしロープから手が離れれば奈落の底まで行くと思われるガレバが数箇所有ったので、その方角を指さしながら持てる語学能力の限界も有り英語だけで 「About two hundred meters away very dangerous zone」 と教えたら 「Thank you for your information」とは言わずに「有難う、さよなら」だって。

何故かとても馬鹿にされた気分でした。
東沢乗越には８：０７着、寒い、寒い、ビバークの痕跡有り。
此処から水晶小屋までは結構スリルに富んだ道である。
岩ばかりの所でのアップダウンも結構あって、ガレ場では時折左右どちらかが切り立って、落ちれば其のままあっちの楽な世界に直行しアウトかな、と思う場所も数箇所有った。
水晶小屋手前のコブに８：５０着、９：０９には発。
此処から見る赤岳（水晶小屋の建っている所）への登りはウーンと唸るほどいやな感じである。
赤岳と称するだけあって、山肌は酸化鉄の色らしく赤茶色であり、草木も遠慮して生えないのか、然程の植生は無い。
自然界の脅威でもある。
高低差１００－１５０m位だろうか、コブから一気に水晶小屋へ向かい９：３５着。
一寸早いが此処で昼飯とした。
参考までだが、これに対比させて、水晶岳を黒岳と言う。
１０：１７には崎間君が沢に落ちても絶対に水晶を取ってくる、と言っていた水晶岳に向けて出発。
此処のピストンも若衆４人にお任せした。
彼らの記録によると小屋前から４０分そこそこの１０：５８には山頂へ着いたらしい。
１１：２０下り始めたようだが、途中で水晶取りか、他の事で油を売ったのでしょうか、はたまた姫野君の例の大キジ打ちなのでしょうか、登りの１．７倍の１時間１０分を掛けて下ってきた。
１２：３０に小屋前に着。
４人が水晶岳に行っている間、かの老人は例の如くあっちにフラフラ、こっちにフラフラしながら、近景、遠景など好き勝手に写真の撮影で時間潰しをした。
１２：４０此処の小屋の管理人に挨拶し出発。
まだ水は十分有る。
良かった、この分だと雲の平まで水は何とかなるぞ。
１３：００岩苔乗越分岐に着。
予定していた鷲羽岳のピストンは時間的、体力的に見て難しいとの理由でカットする。
此処は前に祖父岳、左には黒部源流も見えて、広々とした所で開放感一杯でした。
１３：２４発、途中１３：５１に小休止し、１４：０８行動開始、祖父岳には１４：２２着。
此処其処に勝手に積んだ多くのケルンが有り、ごろ寝には最適で、ここで１４：４８までゆっくりし、雲の平テンバには１５：１５着。
明日の行動を考えて成るべく祖父岳側にテントを張る。
濯濯と流れる水場を期待していたが、蛇口からポタリ、ポタリとしか出ずタンクに一杯汲むだけでも時間が大変だ。
空模様が悪い。
夕食後、柴崎君はトイレに出てゆき、１８時前に男の若衆３人が山荘に行ってくると言う。
往復１時間もあればOKの距離で暗くなる前の７時頃には帰れるだろうし、足元の悪さを考えれば微かでも見える内に帰った方が良いぜ。
皆なにビールをご馳走しようと、お金を渡し買出しを依頼した。
平坦部に出るまでの登りはゴロゴロとした石ころで足場は悪く、月が無いために暗くなるとより一層歩きにくく、しかも靴を履いておらず、サンダル風の物である。
捻挫や爪を剥ぐなどの危険は大である。
３０分経ってもトイレに行った筈の柴崎君が帰ってこない、如何したのだろう。
昨晩、野口五郎小屋に残っていた例のサツマイモは蒸かして食べなかったので、便秘は解消していないので時間も掛かるのだろう…。
それにしても遅く、まさか便槽に落ちたわけでは有るまいが、トイレまでの足場も石ころ道なので転んで頭でも打ったのではないか、と時折見渡すがそれらしき人影は見えず…。
４０分経っても帰ってこないし、辺りは少しずつ薄暗くなり始める。
山荘に行った若衆３人は７時になっても帰ってこない。
一時間の予定だからそろそろ遠方に見え出しても不思議ではないのに…。

雨が相当強く降り出し、もう知らんわい、とふて腐れてテントの中に…。
仮に彼らが方向を見失って、どこぞトンでもない所に迷い込んだとしても、男３人だし、この程度の寒さなら大丈夫だ、死にはせぬ。
１晩明けて、明日の朝になれば判明するさ！
そうは言っても月は無く暗いので見通しも悪い筈だから、遠くからでもテントの場所が解るようにと懐中電灯を灯したが、彼等から蝋燭を渡されていないし、そこ等を探すもないし、何処に直してあるかも聞いていない。
他人の荷物を探るわけにも行かない。
今度は電池が切れそうになる。
こん畜生！
リチウム電池はこんな時にいかんなぁ。
電池切れの兆候が出て、アウトになるまでの時間が早すぎ、あっという間だ。
手探りで何とか予備の電池を探して入れ替えた。
依然としてトイレに行った柴崎君は帰ってこない。
雨の中１９時半前に外に出てみると、遠方の小高い所に光が３個見える。
彼らが帰る方角と一致しているので、彼らだろうと一応安心する。
この雨の中でこんなに遅くまで一体何をしているんだね。
此処にはパチンコ屋は無いだろうし、飲み屋さんも映画館も無いのに…。
三人打ちの雀打ちでもしたのかな。
雨だし、足元に気をつけろよ！
骨折経験者の取り越し苦労である。
３人だから光は３個で良いのだが、そうだとすると芝崎君はトイレに行った侭だが、誘拐されて何処かに連れ去られたのか？
この一帯にはお化けとか、天狗とか、河童とか、変な妖怪とかが居るとは聞いていないのだがなぁ。
それともやっぱり便器の中に落ちて、もがいているのかなぁ。
はやる気持ちも有ったが、自分がテントを去って変な行動をするより、もう暫くじっと我慢し、３人衆が帰って来てから手分けして探しに出ようっと。
そうこうする内にワイワイ、がやがやと近くに声が聞こえ始める。
なになに？女の人の声も聞こえるでは無いか。
なーんだ、トイレからテントに帰らず、そのまま山荘行きに合流したのか？
四人とも社会に出ていないから「報連相」の重要さをまだ知らないなぁ。
僅かの距離なのだから、誰かが引き返して４人で一緒に行くと連絡して行って欲しかったなぁ、さすればこんなに心配せずに済んだのに。
あぁ今日も疲れたなぁ。
色々有ったが全員無事に揃った所で、複雑な思いを噛み締めながらビールを飲んで死んだ真似に入る。

２００２／９／６
夜半より雨が降ったり止んだりの落ち着かない天気。
疲れ気味であり、崎間君からそれと無く昼まで沈殿し様と提案。
其れも良し。
佐伯君は其のうち朝寝に入る。
姫野君は今日のうちには三俣山荘に帰らないとバイト先との約束を違える事になる。
そうであれば雨がこれ以上強くならない内に適当に出ることにするか。
テントの中で粉状にまで崩壊した物（原型がなく自分には何か解りませんでした）を昼飯として、１０：５０発。
三俣山荘まで雨中行軍である。
折角の雲ノ平の日本庭園も味わう所ではなく、そそくさと通過。
此処は高低差も無く、天気がよければ快適な山中漫歩が約束されるでしょう。
途中で雨を凌げるような良い休憩場所も無く雨の中を歩き通す。

黒部源流も見るだけで、一口の水も飲めずに通過する。
テンバを出る時に、途中の黒部源流の水でラーメンを作り、元気を出そうと言っていたので、あの粉状の昼食は充分取らなかった。
雨を避ける為の適当な場所がない、あぁ残念、ラーメンが食べられない。
先頭の柴崎君、２番手の崎間君、次の佐伯君、次の姫野君、皆な元気なのか、ヤケッパチなのか知らないが、休憩なしでそのまま三俣山荘まで行くと言う。
食いたかったなぁ、雨入りの特製の「黒部源流ラーメン」が。
姫野君、佐伯君、崎間君、柴崎君、特製の「黒部源流ラーメン」が食べたくなかったのかい？
行け行け、ドンドンと歩いて三俣山荘に着いたのが１２：４５。
此処で姫野君は顔見知りのバイト仲間に再会する。
雨でびしょびしょだ。
乾燥室は有るが、テント泊の人はご遠慮下さいとの表示がある。
そうだよなぁ、小屋も慈善事業じゃないから、燃料も居るし、空間も占拠するし、床も汚れるし、人件費の事もある。
今後、暫くの間身柄を山荘に拘束される姫野君の立場もあるし、こんな時には小屋を利用して上げ、売上に貢献するのもある種のマナーだねぇ。
営業の仕事が長いとついこんな気を使うようになるのです。
一旦は全員素泊りの手続きの為に帳面に記入するも、彼等は深い事情が有ってテント泊するという。
姫野君は今日から山荘の汚い狭い部屋に宿泊なので、客として乾燥室やトイレ、炊事場所などを使用するのは４人で、小屋への営業的な配慮を考えて、素泊りだがご老人１人が人質になって、他の３人は特殊な事情に因りテント泊するが、４人分の衣類を乾燥させて貰えるように取り計らって貰ったのです。
交渉成立、目出度し、目出度し。
小屋には野口五郎でテント泊していた池袋の人が自分と同様に素泊りで、食事つきで泊まるのは水晶で一緒だった東京のご老人などが３人で、全部で5人でした。
一寸布団が湿っぽかったが楽チンでスヤスヤと寝られました。

２００２／９／７
一昨日の夕より雨に降られて一寸意気消沈か。
昨日のNHKの天気予報を見ても、東北地方から信越地方に掛けて前線が発達しており、佐久地方等には集中豪雨の警報が出ており、信州の天気は良くないと言う。
この為、昨夜の内に予定の変更を考え、槍をカットし双六山荘から新穂高に下ることにした。
余談だが、朝、歯磨きの折に左下の奥歯３本分のブリッジ付き入れ歯を外し、掃除していた時、手が滑り落としたところ、何とストレーナーが無く、塩ビパイプの中に入って行ってしまいパーと成りました。
治療費が保険を利かせても5万位掛かるかなぁ、クシュンとなる。
此処から新穂高まで普通に行って７時間か８時間は必要との情報。
途中まで様子をみて、メンバーの体力的条件が悪く予定通りこなせない場合、ワサビ沢の増水で渡渉不可の場合、コース途中のガケ崩壊などで下りきれない場合には、鏡平ないしはワサビ平で泊ることも視野に入れ、最悪の場合は途中でのビバークも考慮し、多少余裕を持った其れなりの食料を準備し、余った食料は小屋に残る姫野君に贈呈して５：３５より下りを開始する。
５人の全員写真を小屋前でパチリ。
夜明けの槍が綺麗に見えるが、天候は本当に崩れるのか？
行けないのは残念な気もするが、後々山は荒れるのでしょう。
三俣峠に６：０８着、休憩後６：３３発。
双六小屋手前に７：１４着、休憩後７：３３発。
双六小屋には８：０３着。
良い小屋であり、トイレは綺麗で最高に良かったと崎間君が言っていた。
まだ雨は落ちてこないが、どんよりとした曇り空、遠くは霧模様。
先を急ごうと８：３１発。
此処からは多少のアップダウンが続くが、弓折岳直前の笠ケ岳への分岐までノンストップで９：３５着。

ペースは速い、速い。
朝食から既に５時間経っており、エネルギーを補給して血糖値の上昇を計り、フラフラ感を防止する為に昼飯とする。
先手先手である。
佐伯君はまだ腹が減っていないのでしょう、此処で食べるんですか？と怪訝な顔。
そうだよ、腹が減っているかいないかではなく、血糖値を上げておかんとまずいよと返事。
此処でのバームクーヘンは美味かったよな。
９：５５に出て、１０：２３鏡平小屋に着。
絶景を謳っているだけに、環境や汚れを防ぐためか、幕営禁止でテント派には何とも辛い所である。
人工的なので早く逃げ出したい気持ちにもなったが、１０：５８までぐずりぐずりとする。
此処からも先頭の柴崎君、ペースの速いこと、速いこと。
ちっちゃい体の何処にそんな馬力があるの？
そんなに長いと言えるコンパスではないのだが、妖怪か天狗みたいにスピードがある。
鏡平の分岐に１１：２６着、１１：４８発。
秩父沢までぶっ飛ばし、資料で１時間の所を３０分で歩き、１２：１６着。
此処で良い沢水にはお別れなので、しっかりと飲む。
ミネラルたっぷりでうめぇなぁ。
この分だと新穂高まで下れるぞ。
１２：３９発。
ワサビ平小屋までワンピッチで１３：２６着。
一応、此処で即席老若男女混合パーティの解散式を行う。
ビールだとまだこの先が有り、問題が出てもいかんので、コーラで乾杯、お疲れ様でした。
このワサビ平小屋を覗くと泊り客らしき人は１人も居らず、なんだか小母さんも愛想が良くない感じなので薄気味悪くなり、当初宿泊を予定していたが変更して新穂高温泉まで行くことにした。
１４：０１に出て１４：５８に新穂高温泉に到着した。
学生諸君３人は此処からバスに乗り適当に帰途に着くため、バス停前の無料公衆浴場に浸かって、身綺麗に成る予定だという。
此の地は２年前の４月、女房との旅行で飛騨高山や白川郷へ行った折に立ち寄って、西穂高口のロープウエーに乗り、雪の北アルプスを眺めて遊興した所なので勝手はよく解っている。
早速、村営笠山荘のフロントに行き、品の良い老婦人に飛び込みで宿泊を依頼し、OK となり直ぐに温泉に浸かる。
山中で使って汚れた衣類は悪臭が出ないようにポリ袋に密閉し、下界用の取っておきの衣類に着替える。
あぁ、さっぱりした。
温泉には其の日に二回、翌朝４時から二回入り、擦って擦って擦り上げて垢だけはしっかり落とした。
浴場で誰かが使った後に放置したカミソリを探すが見当たらず、長い口髭も優雅だと勝手に決め込んで放任する事にした。
夕方になって岡谷市の原川君宅に電話を入れ、山口の自宅には気になっていた案件の様子を聞き、対処方法を女房に指示し、明日原川君宅に途中寄港できるように手配を済ませた。

２００２／９／８
７時半発のバスで松本に出て、此処から岡谷まで JR、駅まで出迎えて貰った原川君には車で諏訪湖周辺の案内をして頂き、其の日はお宅でご夫妻の歓待を受け、奥さんの手料理に舌鼓を打った。
お世話になりました。
当日、ご長男夫妻が高校時代の友人の結婚式で名古屋から見えており、披露宴の終わるのを待たれていた萩出身の若奥さんにもお会いできたのは何かのご縁でしょう。
諏訪湖には立派な道が周回しており、湖畔には多くの美術館やガラス工芸のお店も有り、この地の文化レベルの高さに感心した。
此処は「女工哀史」の背景の地でもあり、絹織物で相当の富を蓄えて今日に至っている事から、経済的にも今だ豊かさを保っているとの事である。

「歴史が持つ余裕とか大きさ」だね。
琵琶湖周航の詩の作者小口太郎氏は若くしてこの世を去ったが、此の地に生まれ育ち、この詩を作る折には、幼き時代に確りと脳裏に植え付けられた諏訪湖の情景を思い浮かべて作った、と彼から教わった。銅像の横の碑には３高時代の級友である筑波大学長江崎玲於奈氏の筆で詩が綺麗に刻まれ、若き良き時代に醸成された深い友情の証を感じ取らさせて貰いました。

２００２／９／９
今日の月曜日に名古屋に出張の彼とご一緒し、名古屋から新幹線で小郡まで。
あぁ帰ってきた、山口に。
又、明日から現実が待っているのだなぁ。
学生諸君はあれから如何したのだろう、無事帰ったのかなぁ。

払い込み用紙より

▼1972年3月卒
田中　秀平　　新たにメンバーに加えていただき嬉しく思っています。ワンゲル時代のとくに夏合宿の思い出は今も強烈かつ鮮明なものがあります。懐かしいですね。

▼1987年3月卒
三浦(岸下)美穂　　7月30日から上高地、乗鞍岳に行きました。山大のユニフォームを探しましたが誰にも会えず残念でした。何年かしたらアルプスにも挑戦したいです。

▼1969年3月卒
原　具寛　　先日東京支部の暑気払い会にはじめて出席させて頂きました。何しろ卒業以来 30年以上御無沙汰でしたので今浦島のような感じでした。皆さん年相応に貫禄がつかれ頼もしい限りでした。

▼1974年3月卒
古谷　啓太郎　　最近は山とは程遠く家族で年に1～2度キャンプ(オート)へいく程度です。この8月は広島もみの木森林公園へでかけました。

▼1986年3月卒
中野　正浩　　新生OB会おめでとう。ホームページの設置は本当にうれしい。会社の公用アドレスしかもたないから自由には使い辛いけど早く個人で持たなくては、と思いつつここ数年。すっかり時代に置いていかれた。今後も、皆さん、山行を楽しみつつ、時代を、人生を楽しんでください。

はがきより

▼1999年3月卒
渡部　玄　　航空･宇宙業界に就職しシステム・エンジニアしております。 H－ⅡA関係の仕事で種子島へ出張することがあるのですが、そのときは屋久島によってみたいです。

▼1979年3月卒
深田　明　　最近私より年上のOBの方と二回ほど集まる機会がありました。

敬称略

▼1970年3月卒
野村　博　　やっと一体感がでてきました。大変喜ばしいことです。現役諸君も大いにがんばってください。卒業したらぜひOB会へお待ちしております。

▼1981年3月卒

幸西　義治　　本部と一緒になって工学部のOB会も充実し嬉しく思います。

尾崎　岩太　　同期の連中とは時々連絡を取ることがあったのですが全体としてこのように活動が広がっていたことは全くしりませんでした。今後もがんばってください。

▼1984年3月卒

大田　剛　　OB会の新体制発足を嬉しく思います。OB総会も是非機会があれば出席したく思います。今後ともよろしくお願いします。

OB会の名称と図案募集中

OB会の名称と図案(ワッペン等に利用)を募集しています。採用者には豪華商品を贈ります。奮ってご応募ください。応募は事務局または会長、副会長宛にどうぞ

編集後記

2002年度OB通信第2号の完成、発送をもってようやく引退することになりました。引継ぎの時期の改正により2003年1月1日より第42期執行部で主将をやっていた藤田康雄にバトンタッチです。

私事ですが、今年の夏に初めて海外旅行にいってきました。夏合宿の連絡先を他の4年に任して中国・チベット・ネパール・インドを1ヶ月でまわってきました。使い古したアタックザックにシュラフなど持っていったので、見てくれだけはさながらツワモノのバックパッカーでした。

夏といえば夏合宿しか知らなかったこの大学生活でとても新鮮で強烈な思い出となりました。ワンゲルで養われた「どこでも寝られる、少々汚くても食べる、臭くても平気」精神がとても役に立ちました。

1月でようやく私も引退することができます。本当に長かった4年間でした。事務局として命ぜられたこの1年間を振り返ると会長、副会長ならびに諸先輩方には本当にご迷惑おかけしてしまい、ただただ平謝りです。社会人であるOBとの接点がある事務局をさせていただいたおかげで、大学生ながら一足先に社会人としての、人としての様々なこと教えられたようなきがします。

最後になりましたが、少しだけ私を大人にしてくれたこの山大ワンゲルとOB会とお世話になったたくさんのOBの方々に感謝とお礼の気持ちを表して事務局の椅子から降りたいと思います。

どうも1年間ありがとうございました。

編集：藤井　祐介

次期事務局長より～

2003年度藤井さんの後任の藤田康雄です。さらなるOB会の発展と現役とOBの窓口として一年間がんばっていきますのでよろしくおねがいします。

第42期執行部主将　藤田康雄